
黒の指揮官

冬城 一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の指揮官

【Nコード】

N2431BA

【作者名】

冬城 一夜

【あらすじ】

友人が異世界トリップして行方不明。そんな事とはしらず、行方不明になる直前の友人から送られた新作ネットゲームの登録サイトに登録しにいつてみる。どうせこのゲームに夢中なんだろう?と思いながら。

そして案の定ゲームの登録が完了すると異世界に飛ばされてしまう。いつもどおり女の子キャラを作ったから、女として……。

R - 18で投稿している「銀の戦乙女」の隣国である帝国を舞台にしたお話です。

女の子として異世界に飛ばれた主人公（中身男）のお話です。
やっぱり題名どおりの2つ名がつくかは未定です（笑

小説初心者です。読みにくかったり、誤字脱字も気をつけていますが、多いかもしれません。ご指摘などツツコミあればいれてください。

生暖かい目で見ただければ幸いです

1 / 8

小説題名を変更しました、しっくりこないので変わるかもしれませんけど・・・

1話 プロローグーまさかの巻き添え？ー（前書き）

銀の戦乙女にえっちなシーンを入れるのが大変なので

冒険シーンだけ書きたいだけかけるはず！と軽いノリで書き始めました。

がんばりますので、生暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

1話 プロローグーまさかの巻き添え？ー

まずは、自己紹介をしようともう。僕の名前は、ティーティアもちろんネットゲームでのハンドル。

親しい連中からはティアと呼ばれている。中身は三十路に足をツッコミかけている、しがないサラリーマン、もちろん男。

MMOが大好きで、対人戦闘が好きだ。なので今日もゲーム内で戦争に参加し前線で指揮をとっていた。

それでも、そこそこゲーム内では有名で親友のイリーナ（中身は男だ）と並んでギルドの双壁として有名だった。

仕事が忙しくなったイリーナの代わりに戦争に参加していたのだが、戦争中に新作MMOのβテストに当選したんだとURLをおくってこられた。

もちろん忙しかったので、あとでみるよとスルーした。

その日から、イリーナがネットに来ない。何かあったのか？と思う。

ちなみにソイツの中身は斉藤 啓二。付き合いも長い親友、悪友ともいえる。

毎日ネットにだけはきて挨拶はしていくアイツがこないとなるとさすがに、気になる。そういえばβテストがとかいっていたな。

アイツはいつもイリーナで登録するから、そのゲームに夢中ならす

ぐにわかるだろう。

チャットログを見つけて、URLを開く、砂嵐？いやいや、Not Foundならともかく砂嵐って？

突然画面に現れる。転生者はただ1人。されど唯一無二の例外を認める！と言葉が表示される。

意味がわからないが、演出なのだろうか？無駄に凝っているなともい、表示されるままに心理テストのようなアンケートに答えていく。

適度にごまかしながら回答し、ようやくキャラクター設定画面にたどり着く。

キャラクター名はいつもどおりに
ティーティア・シュテルンでいいかな。

ー種族を選んでください。
うーん、幼女をつくりたいけど、人間幼女だとキャツキャウフフで
きないし（いやゲームじゃしないけどさ？
ハーフエルフあたりにしておくかな？

ー性別
かわいいショタっ子というのもいいけど、幼女だよね。かわいいは
正義です。

黒髪のアストレート、背中にちょっと届くぐらい？
体つきはちつぱいは正義ですと・・・、ハーフエルフだから口
リババアになるのかな。

瞳の色か、金色と赤？うーん、合わない。金色と碧眼にするかな？

――特化魔法選択

得意属性を選ぶのかな？定番物の属性から時空、死霊・・・創造魔法？うーん、アイツが好きそうだなあ。

お？渋いがあるな、

加工魔法

物質を加工し、武器や防具など多彩な物を生産する事が可能な魔法。魔法に熟練することにより生産品の出来なども変わる。

生産職バンザイ！

――種族スキルを選択

輝く命の奇跡 スタミナ消費を抑えることができる オッドアイ
ハーフ故に左右の目の色が違う 魔力＋１ 魔術才能 体内の血
のせいかな、効率よく魔力行使が可能

特性ーキャラクター作成後自動選択されます

さっきのアンケートで決まるっばいかな？

――異世界に旅立つにあたり、この世界へはもどることができません。それでも貴方は行きますか？

凝ってるなあ・・・もちろんはい

――本当にかまいませんか？

なんだろう、一抹の不安を覚えるんだけど・・・。はい

ーそれでは、貴方の新しき人生に幸おおからんことを

くらつとする、立ちくらみを起こしたような・・・そして瞬間的に悟る、これ。ヤバイ・・・たぶんこれでイリーナ来なくなつた？ああ、夢だいいいな・・・

1話 プロローグーまさかの巻き添え?ー（後書き）

設定などは次の話で必要であろう根幹部分だけいれます。
必要になった設定などは都度いれようとおもいます。

2話 幸運の効果？

賑やかな街を空の上から見下ろしている。古代ローマ風の街並み、街を城壁がぐるっと囲んでいる、外敵がいるのだろうか？

意識ははつきりとしていて、なんとなくイリーナがよくネット小説で読んでいた異世界転生なのだろうと理解してしまっていた。

めんどろな事になったなあとあまり深くは考えないようにする、心が壊れてしまいそうだから。

これ、知識もなく異世界に放り出されたら野垂れ死にするよね？とか思っていると知識がどこから流れこんでくる。

銅貨10枚で銀貨1枚 銀貨20枚で金貨1枚 金貨20枚で白金貨1枚。頭の中で銅貨一枚で100円と思う自分がいる。

そしてこの世界には遺跡と迷宮が存在すること。遺跡はそのまま古代の遺跡、よくあるRPGなどのダンジョンと一緒にだ

迷宮というのは魔界から伸びる侵略経路のことで、地下から木の根を逆さまにしたようなモノが地上に伸びていると想像するとわかりやすいかもしれない。

世界に大小ふくめて迷宮の先端が地上に届いて穴があいており、そこから魔族やモンスターがでてくるようだ。

この魔族というのと別に悪魔族というのがあって、インキュバスやサキュバス、ヴァンパイアなんかのどう考えても一般的にいう魔族

なのだが

魔族の中で友好的な戦争の際に人間側についたので別の名義で呼ばれている。

地上に空いた迷宮の穴は大穴6つあり、過去の戦争や神々の力において封印され、現在大穴は隣国の街の近くにある物1つだけが通行できるようになっている

地上での大きな戦争は200年ほどに行われたのが最後である。

うーん、技術が追いついているなら、完全体感型のVRMMOと言われても納得してしまいそうだった。

しかし、親切なのか残酷なのか微妙な知識だけ教えてくれた……
どうしろっていうんだ！

うん？急に身体が引つ張られるように都市近くへと降りていく。

どうやらここがスタート地点、これから僕の物語の始まりになるようだ……いやいやいや、常識もなにも理解していないの？

ふわりつと城壁の外の地面の上に降り立つ。ぺたぺたと身体を触ってみるとキャラメイクした通りの身体であるらしい。

鏡でもあるといいんだけど。

持ち物は……ボロボロのローブ、ボロボロのスボン、ボロボロのシャツ……銀貨3枚……。

どうしろというんだろうか？なんだこのマゾゲーは！と悪態をついて運営に文句が言いたい、ゲームなら。

イリーナどこに居るんだろう？逢えたらお金とか援助してくれないかな？

死んでも生きてるかもわからないし、とりあえずは街へ入って安全の確保とお金稼ぎかな？

加工魔術を選んだから手頃な素材か何かを加工して売ればよいかな？

とりあえず、持ち物は確認した・・・ステータスとかは見えないかな？と思ったら視界の隅？とは違う、意識の隅？ここに

よくあるRPGのステータスメニューがみてとれる、ああ・・・なんか、夢であってほしいと思いながら

冷静に事実を確認し、把握していく。ステータスや魔法などは設定した通りで間違っていない。

途中で頬も抓ってみたけど痛かった、死んだら終わり・・・だよな？頑張って生きよう。

そういえばキャラ作成のあとに割り振られるっていう特性は

特性：傾国の美女 魅力+3 国を傾かせるほどの美貌を持つものに与えられる。その魅力は同性、異性を問わない

特性：指導者の極意 カリスマ+4 他の者を圧倒的に惹きつける、魅力とはまた似て非なるモノ

特性：天使の声 カリスマ+1 透き通るような美しい声は聞く者

を魅了する。

特性：妖精の指先 器用＋4 細かな作業などをまるで妖精が踊ることくこなす指先。器用な指先の上級特性

特性：祝福 幸運＋3 如何なる因果か、貴方には幸運が訪れることがある

うーん、カリスマと美貌？女帝にでも慣れというのだろうか？

ボロボロの身なりのまま、都市の城門へと歩いて行く。

関所のような物があつて、鎧をきた兵士がいるのを想像していたのだが、ちがった。元の世界の軍服にしか見えない。

深緑の軍服を着た兵士が関所で荷物のチェックと身分のチェックをしているようだ。

思わず列に並んでしまったけれど、ハーフエルフって大抵は迫害対象であったりするし、そもそもこの身なりで都市にいれてもらえるのだろうか？

しかも、結構コワモテの兵士さんだ。

「次！！」

言われてびくつと肩がすくんでしまつ、ちょこちょこと歩いて兵士の前へいくと、名前を聞かれる。

「あ、ティーティア・・・です、ティアって言われてます」

怯えたような表情を浮かべて見上げる、設定した通りの外見ならい

ケル！と打算的な事を考えている。

「怯えさせたようだな、すまない。街へはいるには銀貨2枚の税を納めるか、通行理由が証明できる身分証になるカードを提示する必要がある」

目が合うと、兵士の表情に一瞬哀れみのような感情がみえる、身なりからしても仕方がないことだしね。

よくあるギルドカードとか、そういった類だろう、もってるわけはない、この衣装と銀貨3枚以外なにもないのだ。

「あり・・・ません・・・、お金でいいですか？」

そういつてぼろぼろの布袋をひっくり返して銀貨3枚を取り出して、2枚渡そうとする。

「確かに受け取った。必要であるなら中央広場に帝国の役所がある。住民登録や冒険者ギルドへの所属手続きなどもできる。行ってみるといい」

顔とは違い、優しい人のようだ。受け取った振りをして銀貨をもっている手を握り直させてくれた。

なんだろう、他愛もない事のはずなのに、目尻に涙が浮かんだ。

「ありがとうございます」

ちょこんとお辞儀をして、街へと入っていく。すごい人だ、うーん、視線が低いせいで全然場所がわからない。

中央広場といていたから、真っすぐ行けばいいかな？

キョロキョロと辺りをみまわし、道の端へでたりして場所を確認しながら歩いて行く。

時折軍服をきた兵士が2人1組で巡回して回っているためか、治安は良いようだ。裏通りなど変なところへいかなければ大丈夫かな？

よく整備された道路を歩いて行くと、広い噴水広場に馬車や行商人が行き交っている。役所・・・あれかな？

石造りの立派な建物、城門にあつた紋章と同じ三日月と獅子紋章が描かれた真紅の旗が立てられている。

恐る恐るといった感じでドアを開ける、受付らしき窓口までいくと事務服を来た女性に声をかけられる

「なにかごようでしょうか？」

「あ、えっと、街を入るときにここにくれば、色々登録をしてもらえるって聞いてきました・・・」

「わかりました、都市の住民登録、冒険者ギルドの登録、孤児院への受け入れ登録などもできますが」

この格好だ、孤児院へはいるのかと思われたのだろうか・・・さすがにそれはちょっといやだ。

「街で商売、露店などをしたいんですけど・・・」

「え・・・？そう・・・ですか？？ちよつとお待ちください」

どうしようか？と思案しているようである、身なりもぼろぼろな子供が商売がしたいというのだ、悩むだろうなあ。

「そうだ、ちよつとリュシカ！リュカ！またさぼってるんでしょ？！」

何かを思いついたのか受付の人が名前を呼ぶと、さらつとした長い金髪を後ろで束ねた白い軍服を着込んだキリつとした印象の美女がこちらへむかってくる

「なによお、人聞き悪いわね。書類仕事を終えてお昼と一緒にたべようと思ってきただけじゃない」

「貴方見合いの話がうつとしいとかいつてたわよね？！この子の後見人するのはどう？遠縁だとかなんとかで、それならもつともらしく断れるでしょ」

「ええ？ちよつと、いくらなんでも・・・いえ、けど・・・それも」

「それにこの子、かわいいわよ？孤児院で樂するんじゃないで露店でもいいから商売したいなんていうのよ？助けてあげたいじゃない」

「え・・・いえ、けどさすがに、私が面倒をみるなんて！」

なんだろう、僕を放置して僕の処遇がすごい勢いで決定されていつてるような気がする、書類書いちゃうからとか、戸籍作成とか物騒な単語も聞こえてくる

「あ、あの！すいません、これでもハーフエルフなので27なんです」

思わずむこうの世界での年齢を答えてしまう。2人の視線がこちらへ釘付けになって、まじまじとみつめられる。というか顔ちかい、近いですよっっ！！

頬を染めて視線を逸らすと顔をリユカさんに掴まれる。

「あ、ほんとだ。エルフ耳……………」

「え？けどもうティーティア13歳って登録しちゃったわよ？しかもリユカの遠縁の親戚、両親は事故により死亡って」

おおおい、何をしてるんですか、僕なにも同意すらしてないですよ？！

「そつか、じゃあいいわ。この子は私が面倒みるってことで！」

ええええ？！ノリ軽いですよ？！ねえ？見知らぬ男、いえ外見女ですけど、引き取るとかいいんですか？

「いいわよね？」

ずいっと顔を寄せられる、石鹼のような匂いがしてドキドキする……うなづくしかなかった。

幸運の効果なんだろうか？

3話 男の尊厳（前書き）

羞恥プレイはご褒美です！！！！！（キリッ

3話 男の尊厳

前を歩くリュカさん、ぴつちりとした身体のラインのどる軍服のズボン、形のよいお尻が目にある。

ああ、なんだろう、すごく触りたいです……。痴漢の気持ちかわかる……。*痴漢は犯罪です

だめだだめだ！今の僕は表面上女……。うん、耳まで真っ赤な気がするけど、とりあえず落ち着くん。

「あ、そだ、えっとティアちゃんだっけ？って……。私より年上なのよね？」

「ふえあ！？は、はいっ」

急に振り向かれる、後ろめたいことを考えていたせいか、思わず声をあげて驚いてしまう。

「ちょっと、そんなに驚かなくていいじゃない。おねーさん傷ついちゃうなあ。それでさ、一応書類上は年下だしティアちゃんていいよね？」

にこっと微笑まれる、吸い込まれそうな綺麗な碧の瞳が見つめてくる。

逆らうことができずにこくんっとうなづく

「よしっつ、それじゃあまずは服と下着よね！……かわいいの買っ

てから帰ろ？」

むぎゅっと抱きしめられて、髪の毛から石鹸の匂いと、胸の感触と・
・あああ、僕の息子が今は居なくて助かった。

え？息子なんているのかって？、何言ってるんですか、男なら生ま
れたときから股間にむs・・・(ry

今最後のほうにちらっと聞き捨てならない単語が聞こえたような・
・可愛い・・・下着？！

「あ、え、ちよつつ、リュシカさんつつ???!」

ガシツと手を掴まれて引つ張られていく、ああ、軍人さんなんだな
あと引つ張られる力強さに現実逃避をしていた。

「え・・・つと・・・」

なにが、どうして!!こうなった!!!!鏡の前は僕は叫びたかつ
た。

身ぐるみを剥がされ、店員さんとリュカさん2人がかりで、あれが
いい、これがいいと取っ換え引っ換え下着をつけさせられた。

というか、男なので女物の下着なんて付けたことはないので、綺麗
なお姉さん2人に女物の下着をつけさせられるのだ、どんな羞恥プ
レイだよ。

この業界ではご褒美です！と言いそうな紳士な知り合いが何人が頭に過るけど、居なかったことにした。

「これなんてどう??」

つと、ピンクにフリフリのついた可愛らしい下着をもってくるリュカさん

「こういうまた違ったギャップもよろしいかと思えますよ?」

黒いレースの付いた大人用の下着にしか見えない物を店員さんが持つてくる・・・いや、なんでそんなエロイ下着の子供用があるんだよ！この帝国のやつは紳士ばつかなのか！！

「あ、いいわね。ティアの白い肌に栄えそう。それなら更にガーターとストッキング付けてみるのはどうかしら?」

「さすがですわ、あとは黄金パターンとして、リボンの付いた可愛らしい薄緑の下着なんかも・・・」

お母さん、お父さん、僕は男として大事な物を無くしていつてる気がします、誰か助けてください。

そんな祈りは天に届くはずもなく、たつぷりと3時間はきせかえ人形としていろんな下着を着せられた。

買ったのは、勝負用?の黒い大人びたレースの下着、ガータベルトにストッキングつき・・・ストッキングはすごく高いらしい。そりゃ・・・なあ。文化水準が・・・。

ピンク色のフリフリのついた可愛らしい下着と似たようなもの数着。
白生地にピンクのリボンのついた下着、同じくリボンのついた可愛らしい薄緑の下着。

「よっし、じゃあティア！今度は服よ！服は女の戦闘衣装だからね！」

ああ、神なんてのがいたら、ワクテカしながらこの状況をみているんだろうか、会うことがあったら絶対殴ってやる。

ちなみに、ここだけの話、下になかったんだ。いや、息子さんの話じゃなくって、毛・・・うん、自分の裸に思わず鼻血だしそうだったよ？

服屋についてもリュカさんの暴走はとまらず、大絶賛着せ替え人形なう・・・orz

「あの・・・リュカさん、ほんとに来て動けたらそれで・・・」

「ダメよ（ですわ）！」

やっぱり店員さんと同調してユニゾンで返される、もういい、好きにしてください、さっきのランジェリーショップといい、もう諦めました。

途中から何を血迷ったのか、黒髪に合う！とかいわれて、ゴスロリ風のドレスを着せられたり、真っ赤なドレスを着せられ

店員さんが、ああ良いですわ！！！割引させていただきますので、モデルをしてくださいませと、記憶水晶？写真になるのかな？撮られた。もういつそ一思いに殺せ or z

結局決まったのは、ふわりとした白にうつすらとピンクの入ったフレアスカートというのだろうか？女物なんてさっぱりわからないが・・・。

それに、白のシャツ、水色のジャケット？上着っていうのかな、服の名称なんてよくわからないが、そんな感じ

ちなみに、店員さんにリュカさんがあれとこれとあのドレスも後で家に届けて欲しいと言っていたのは、気のせいだと思いたい。

「あう・・・リュカさん・・・落ち着かないです」

足がスースーする、ちよつと動くと下着が見えそうだし、この女性用の下着もすごく違和感満載だ。

男としてもう、なんか・・・色々と泣きたい。

「大丈夫よ、可愛いわよ！自信もっていいわよ、攫いたいぐらいだから！」

にこにこと上機嫌とリュカさん、攫いたいってなんですか、攫いた

いって。それって危険度倍増ってことじゃないですか？

僕攫われるんですか？男に攫われてアー！とかいやですよ、そんな事になったら、世界を滅ぼす魔王として覚醒したりしますよ？

「・・・よくないです」

むっとして少し不機嫌に顔を逸らす。

「ああ・・・不機嫌なのもかわいい・・・」

むくれて頬をふくらませた僕に身悶えるリュカさん。だめだ、この人、はやくなんとかしないと。

「つとここよ、こご。、ついたわよー？」

おお、洋画などでよく見るアパートちつくな建物。大人2人がすれ違える程度の階段を上がって3Fへ

「汚いから恥ずかしいんだけどね、さあ、どうぞ？」

そういつて部屋へ・・・と・・・うん、リュカさん・・・世間一般で男がみたら夢を完膚なきまでに壊しそうな程の散らかり具合ですよ？

姉の部屋を見たことがあるので、問題ないのだけど。

そこらじゅうに散らばった服、下着・・・いや、下着ぐらいしまつところよ、リュカさん・・・しかも、結構キワドイのが混じってる。

だめだだめだ、落ち着くんだ……こういうときは羊が1匹
羊が2匹……ってちがう！

お？奥の部屋に白い騎士鎧と剣の予備だろうか？リュカさんが今腰
に下げているのと似たような剣が、この周りだけ綺麗に整頓されて
置かれている。

「そこらへん空いてるところ座ってね、夕飯作るから。ってティア
？鎧みてるの？」

じつと白い綺麗な鎧を見ているとリュカさんがこちらへきていた。

「あ、綺麗だなーとおもって」

そういう僕にリュカさんは嬉しそうにほほえむ

「ふふふ、そうでしょうそうですね。この鎧を着たいがためだけ
に、騎士になって死ぬほど努力したんだから！」

それでいいのか………??

「ティアも騎士になれば、かつこいい鎧が着られるわよ？私の所属
している帝国第2白騎士隊の鎧なのよ？」

嬉しそうにしゃべるリュカさん、すごいですねと適当に相槌を打ち
ながら苦労話を聞かされる、子供にそんな話するなよ。

ああ……長い……ご飯をたべている間もずっと続いていた。

「お風呂は宿舎までいかないといけないから、明日にするとして、さ寝るわよ?」

いや、寝るってベッド1つですよ?あ、床で寝ろってことですね?わかります。

「なにしてるの?早く横に来なさいよ?」

寝間着姿のリユカさん、ぽんぽんとベッドの空いてる所に手招きしている。

「え?いえ・・・けどさすがに、同じところで寝るといっのは・・・抵抗があるといえますか・・・」

「いいから、いらっしやい!」

無理やり抱えられベッドに連れて行かれ、抱きつかれて抱き枕よろしくホールドされてしまった。

良い匂いがします、部屋どころかベッドから甘い女の子の匂いがします。心の中で息子がもうだめだ!と言っています。

今からでも遅くない床・・・あれ?寝息が聞こえる。そうですか、どこでも速攻寝れる特技というやつですか・・・

人生諦めが肝心です、ここまま寝ること・・・寝る・・・

・
・
・

・
寝れるか！！！！

なんの拷問ですか、綺麗なおねーさんに薄着で抱きつかれ、肌の感触や胸の感触。ベッドは甘い女の子の匂いに、リュカさんからは石鹸の匂いがするし！

しかも、寝ているはずなのに、僕を抱える腕は動かない、拘束が解けない、なぜだ、なぜなのでしょうか神よ！

ようやく寝付くことができたのは明け方近くになってからだった。

4話 桃源郷と練習試合（前書き）

男の夢です（キリッ

4話 桃源郷と練習試合

・・・朝日が黄色いよ。

結局ともに寝られず、寝付いたと思ったらリュカにたたき起こされて、騎士の宿舎にあるお風呂に連れていかれる途中です。

宿舎の中は、女性騎士ばかりっていうか、なんで美人ばかりなの？面接基準に容姿でもはいつてるの？

ああ、もう、よくわからないうちに脱衣所なんだけど、なんで、リュカさんもいるの？ねえ？

「リュ、リュカさん？お風呂ぐらい1人ではいれますよ？？」

目の前でさっさと服を脱いでいくリュカさん、見ちゃいけないと分かってるのに、悲しいかな視線を外せるはずがない。

「なにしてるのよ、ティア？あなたも脱ぐのよほら！」

ギャーやめてください、僕はいいです、後で1人ではいますー！！

「や、恥ずかしいですからっつ1人では入れますってばー」

ばたばたと逃げようとして暴れる、目の前にリュカさんのおっぱいが・・・ああ、だめだ。ごめんなさい抵抗できません。

なんだかんだで裸にひん剥かれ、自分で設定したとはいえ、このス

タイルの違いはなんだろう。

ああ、イリーナが入れば泣いて喜びそうだね、綺麗な軍人のお姉さんの裸・・・いや、脱がしちゃだめだろうとか言いそう。

「うひゃうつつ!？」

「あははは、ティアちゃんー？なあに？考え事ー？」

不意を付かれました、油断大敵です。いきなり後ろから抱きつかれて身体を洗われています、助けてください

「ちよつつ、まつつ、くすぐった・・・ひゃううつつ」

ばたばたと暴れるものの、綺麗に抑えこまれ、隅々まで身体を洗われ・・・ああ、僕もうお嫁にいけません（違

「うう・・・もうお嫁にいけません」

「あははは、大げさなんだからー」

湯船にリュカさんのおっぱいが・・・あ・・・あう、考えたら負けだ、素数を数えるといいつてエロイ人がいつてた。

素数ってなに?!なんだ?数学はキレイなんだけど・・・!?

真っ赤になつて顔を逸らす僕の髪の毛をリュカさんが触ってくる、微妙にくすぐつたいような感触が・・・。

「綺麗な色よねえ、黒なんて滅多にいないわよ?」

「え？珍しいんですか？」

思わず振り返る、ああ、ダメダ 裸が！！！！

「そうねえ、一部のダークエルフを除いていないわね。ダークエルフとのハーフなの？」

「・・・いえ、よくわかりません」

「そっか、ごめんね？」

空気が湿っぽくなりそうになったところで、脱衣室のドアが勢いよく明けられて、女性騎士の人だろうか？大量の女性がつて、ちよつとまってええええええ！？

「「「あ、リュカ隊長ー」」」

「「わ、かわいいーこの子どうしたんですかー？？？」」

やばい、まずい、ロックオンされた気がする

「リュ、リュカさん、ボクもうあがりま・・・」

「わー、すごい黒髪だー」

わらわらと裸の女体に取り囲まれてしまう、まずい万事休す？！つていうか湯船使える前に身体を洗うのがマナーですよ！

「え・・・えと・・・その・・・あう・・・」

耳まで真っ赤になっているのが、自分でわかる。どこを向いても裸、裸、裸である。

「うわぁ真っ赤になってかわいいー」「ねえねえ、リュカ隊長とどんな関係なの?」「髪の毛さわっていいー?」

「きゅう……………」

その後どうやって、お風呂をあがって服を着たのか覚えていない。

気づくとちよつと用事があるからと言われて、適当に中みてまわってよいよ?と言われたので探検中。

ふふ、ここで本来なら更衣室などに潜入するんだろうけど、もういやだ、あんな目にあっていたら精神的に死んでしまう。

ギョッと大きめのドアをあけて外にでると兵士だろうか?男ばかりの兵士が30人ほど鍛錬場の外を走り回っている。

中央では、数組が剣を合わせている。

へえ、すごいな……。けど、なんか振りが遅い?うーん……………この世界に剣術や剣道ってないんだろうか?

構えもある程度は揃っているけど、バラバラな感じがする?

「あんまり近寄るとあぶねえぞ?」

いきなり声をかけられて、びくんっと肩を竦める。

「すまんすまん、驚かせたな？」

撫で撫でと頭を撫でられる、だから子供扱いするなというのに！むっとした表情で後ろを見上げる。

短く切りそろえた鈍い色の金髪、無精ひげをはやしたおっさんが後ろに立っていた。

「真剣にみていたが面白いか？」

首を小さく傾げる

「んー、なんか動きがバラバラで剣が遅い気がする・・・かな？」

言ってからしまったとおもっ、知らない人間にうかつな事を口にするものではない。

「ほお、ということはお嬢ちゃんに剣の心得があるのかな？」

優しくった声に、わずかに違う感情がまじるのがわかる。なんだろう？嫌な感じはしないけど。

「子供じゃないっ！」

むっとして見上げる、男と目が合う。

「あー！カーター隊長！隠し子ですか！？」

「やかましいわ、ボケ！」

訓練を終えたのだろうか？タオルを首にかけた若い兵士が殴り飛ばされる。酷いですよ隊長！と言っているが無視された。

「それで、どうだ？俺と1つ稽古でもしてみるか？」

「は？隊長とそんな小さな子が勝負したら死んじゃいますよ！？」

黙ってる！と再び殴られる若い兵士、口は災いの元って。いや人の事いえないかな。

「んー、いいよ？」

「お？そうか、んじゃ適当なの選んできな？」

そういつて隅のほうを指差すと練習用だろうか？木刀から刃を潰した剣や槍などが多数おいてかれる。

んー、これは重い。なんかしっくりこない、これもダメ。ぼいぼいと棚から武器をだして触ってみては横にどける。

ん・・・これいいかな？見つけたのは細身のロングソード。重さと長さが道場で使っていた木刀に近い気がする。

「これにする！」

あ・・・あれ？なにこの人ばかり？さっきまで外周を走っていた兵士はおるか中央で剣を合わせあっていた連中も全員が、外側に座って

いる。

「たいちよー！小さな子怪我させちゃだめっすよー！」「隠し子で
すかー？！」「がんばれよー！隊長たおしちまえー！」

いや・・あれ？なんかすごく注目の的ですか？まあ今更やめるわけ
にもいかないし・・・・

「準備はいいか？」

鍛錬場の中央で左手にロングソードをもったカーターと呼ばれたお
っちゃんが準備運動をはじめていた。

「はい、よろしく願います」

目の前までくると、かるく礼をすると礼を返してくれる。

「いつでもいいぞ？」

そう言われた瞬間に右手にもった剣を右下から切り上げる、キン
っと甲高い音がして剣が弾かれた。

そのまま左手で右手を押さえ、弾かれた場所から切り下げる、反
応したカーターの剣と触れ合う直前に身体を右にひねって剣を引く。
こっちの体勢が崩れる前に相手の剣の横を通すようにして突く。ゴ
ンっと剣の柄で弾かれてしまう。

トンっと地面を蹴って距離を置く。

「「おおおお！！！すげえ」「いいぞーお嬢ちゃん」

歓声があがる。

「驚いたな、ハーフェルフだから見た目通りの年齢じゃないとしても……、すまないな、非礼は詫びる」

そういうとカーターが右手に剣を持ち替えて、構える。さっきまでとは違い、隙がほとんど見えない。

「そんな妖怪みたいに言わないでください！まだ27です！」

「27?!」「なんだって!?!」「あの外見で27とか犯罪だろ」「隊長つてロリコンだったんだ……」

「うるせええ！黙れ！！……しかし27って俺のちょっと下かよ……マジか」

じりつとすり足で右にずれると、それに合わせるようにカーターが左にうごく。

うーん、隙が見えないっていつでも、師匠ほどじゃないんだよなあ……。

「シッッ！」

短く息を吐き出しなら喉を狙って突き込む、弾かれる直前に剣を引く。

「ぬっ?」

その直後にもう一度体重をのせて突き込む、単純な二段突きというやつだ。キンッと甲高い音がして弾かれる。

「ちつつ」

そのまま、交差して後ろを振り返る。目の前でカーターが袈裟切りに剣を振り下ろしてくる。

撃ちあうようにこちらも、剣を交差させるが、体格も筋力も違いすぎる。そのまま何度か剣を打ち合う。

「うつつつく・・・」

手がジンジンとしびれる、ああ、いつもの身体ならなんとかなるんだけどなあ・・・。

上段から切り下ろす、剣先で受けられ流されて切り返される剣を正面で受ける。渾身の力を込めて押し返す。

そのまま、カーターが力に物をいわせ、袈裟切りに切りかかってくる。

先ほどと同じように剣を交差させる。ガキツと金属音がした瞬間にはこちらは膝を緩めている。

そのまま剣を後ろに振りかぶるようにして、カーターの剣を受け流しながら相手の右側、背中へ回りこみ

受け流すために振りかぶった剣を相手の頭に叩き下ろし、寸前で止

める。

シンッと静まり返った空気に気づく、ふっと気が緩むとどうしたのか、剣がカーターの左脇から伸びており、自分の喉元にあった。

受け流された後に、無理やり筋力で軌道を変えた？どうしたんだ？あの体勢から、右手の剣を左脇の下からだして自分の喉元になんてそうそうできるはがない。

油断しすぎたのかな。

「「おおおお、すげえええ？！」「」

一瞬遅れて場内が歓声に包まれる。

「おいおい、右手の隊長に引き分けてなんだよ？！化物か？！」「すごいな、お嬢ちゃん。俺の妹にならないか？」「ぜひその剣を教えてほしいもんだ！」「隊長が引き分けるとこなんて久しぶりにみたぞ」

おい、まで、いま1人変な事いったやつがいたぞ！？

「うーむ、すげえな？ていうか、アレだけやって息1つ乱れてねえのかよ。自信なくしそうだぜ」

「よく言います。本気ならボクの剣が触れる前に喉きれてますよね？だから負けです」

「ははははは、そこまでわかるのかよ！？どうだ？騎士にならねーか？！なんなら俺が「そこまでよ！！！！！！」」

ビクッと突然の怒声に身体が硬直する、あ・あはは、やばいリュカさんだ。

「ティアちゃん！なにしてるのよ！？あぶないでしょ？怪我したらどうするのよ」

「いや、俺が怪我させるわ」黙れ、このクマ男！私のティアちゃんに傷でもついたらどーんのよ！！！！」

「こんな可愛い子に怪我でもついたら、アンタの命じゃ償えないのよ！？」

すごい剣幕でカーターさんに食って掛かるリュカさん、ああ、またかと周りの兵士がため息をついているところを見るといつもの光景らしい。

「おいおい、落ち着けて」

「落ち着いてられますか、ティアちゃんは私の隊にいれるんだから！！！！」

いえ、リュカさんなんだか、話題が違ってきているのですが。

「おい、そりゃゆずれねーな！先に目をつけたのは俺だぜ？」

「何言ってるのよ、ティアちゃんの後見人は私なんだからね！」

「けど本人は27だっていったぜ？成人に後見人なんて」

「うるさいわね！本人がそう思ってるだけよ！！！！」

リュカさん、なんか泣きそうです、酷いです。

「ティアちゃんだっけ？はい、タオル」

「ありがとうございます」

若い兵士にちょこんと礼をすると、顔を赤らめられた。うーん、なんか男に赤面されても微妙なきぶんだ。

「最後のあれはなんだい？剣が交差したと思ったら隊長の後ろにいたけど？」「え？そうなのか？俺にはさっぱり見えなかったぞ」「だな、気づいたら隊長の背後にいて、2人とも止まってた」

この若い兵士、騎士と区別がわからないけど、アレが見えたということは結構強いのかな？

「えっと、たしか袖返し？だったかな？」

「私（俺）の元で騎士になるんだよな！？」

いきなり2人がこちらを振り返って、そんなことを聞いてくる

「・・・あの、体格的にむいていませんし、そもそも商売をしにきたので、騎士にはなりませんよ？」

ポカーンとする2人、いやリュカさんには昨日いいましたよね？！

「そうか、それならしょうがないな、気が変わったらいつでも声か

けてくれ……。ところで商売ってなにするんだ？」

「えっと、手近な材料を買ってみて加工して露店でもしようかなって思ってますけど……。？」

「え？ ティアちゃんそんなことできるの？！」

「リュカさん……。昨日言いましたよね？？」

ため息をつく。誰だいま「ため息をつく美少女、是非妹にしたい」とか小声でつぶやいた兵士！！！！

「ま、まあいいじゃない！ それより用事おわったんだから帰りましょ？」

「はい」

小さくうなづいて

「みなさんまた」

ぺこんと兵士たちにお辞儀をして、リュカさんの後ろをついていく。

・
・
・
・
・
・

・
そのあと、ティアちゃんを妹にし隊と、ティア様に蹴られ隊が結成されたのかなんとか。

次の日リュカさんが笑いながら男ってバカよねーと教えてくれた、
すごく身の危険を感じるんだけど・・・・・・・・・・。

4話 桃源郷と練習試合（後書き）

銀の戦乙女とちがい、本能のおもむくままに書いているので
乱文、読みにくいなどご指摘あればお願いします！
感想いただけると喜びます。

5話 初めての加工魔法と商品（前書き）

短いです、スイマセン

5話 初めての加工魔法と商品

リュカさんは今日は仕事だと、朝はやくに出かけていったので1人だ。

とりあえず朝からは部屋の掃除をつとおもってし始めたのだけど、先生、男としてどうしたらよいのでしょうか？

使用済みの女性物の下着……いや、自分のもそうなんだけど、リュカさんの……

いやいやいや、無我でござる、無我の境地で洗濯するのでござる

・
・
・
・
・
・
いい匂いがし……いやいや、ちがうよ！？匂い嗅いだりしてないよ？！

シャツとかほら、大きい物干すのに手一杯にひろげてやらないと小さいから、だめだったただけだよ？！

とりあえず、だいぶ片付いたかな？いらなさそうな物とかは捨てていい物かわからないので、リュカさんが帰ってからかなー？

そうそう、危ないのでまだ、外は歩いちゃだめだといわれた……

・大丈夫なのに。

かわりに、倉庫がわりに借りている隣の下手にあるものは好きに加工してもよいといわれたので、掃除も終わったしさっそく……

「けふつつこふつつ……ほ、埃がいつぱいです」

ごそごとタオルを手にとって口を隠す。なんかガラクタがいつぱい散乱している。

うーん、とりあえず木と石とか、銀は銀貨でいいかな？お小遣いつてことでちよつと貰ったし。

とりあえず、手頃な金属の棒を手取る。加工魔法はいいんだけど、どうやって使うんだろう？

「とう！……あれ？えい！……加工！」

適当に名前を叫んでみるができない、うーん……なんだろう？

掛け声にあわせてぶんぶん振ったりしてみるけど、でてこない。

手にもってイメージを浮かべたら加工とかできないのかなー？ナイフみたいな、うん、こうサバイバルナイフ……

そうすると手の中で金属がゆつたりと形を変えて少し大きめのサバイバルナイフへと変わっていく。

「おおおー？？？こんな簡単にできるんだ？」

いやいや、そんなバカな話はない。本来加工魔法といえば、永遠と作る形を想像し、それを呪文詠唱にしながら加工するのだ。

手にもってイメージしただけで、金属を変形させるなんてチートもいいところである。加工魔法の使い手が知ったら殺されかねないぐらいに。

「とりあえず、何つくろうか？」

うーん、露店で売るなら無難なところで指輪などの装飾品？あとは彫刻品かな？

そういえば、エンチャントはできないんだろうか？といってもやり方がわからないし、イメージしてみたけどできなかったので違うのか？

それとも才能がないのか・・・まあ時間だけはあるのだし、ゆっくりとためそう。

その後半日以上この倉庫にこもって色々と試してた。

まず手に触れた物の形はイメージしたものに变化させられること、速度は遅いが、慣れれば速くなるかな？

ある程度の合成や強化もできるようなことである。

銅に錫を混ぜて青銅のリングにすることもできた。

マイナーだけど、アンチモン化合物があたので、アンチモンを取り出して錫と混ぜてピューターインゴットをつくった。

これを加工すれば銀にもみえるし、そこそこの値段になるかな？この世界には無いかもしれないし、あったら価値を調べておかないためなので

これはとりあえずおいておこう。

街を歩いた限り焼いて強度を増した鋼はあったので、製法を変えた現代の鋼を作れば強力な武器や防具となるだろうけど、これも世界を壊しそう。

タングステンも取り出して合金にできるだろうけど、上記と同じ理由で却下だなあ。

とりあえず、銀貨や銅貨を元にして、指輪、腕輪、木片を削って彫刻にするかな？

うん、露店の許可はリユカさんが今日帰りに役所でもらってきてくれるから、とりあえず無難そうな製品をつくらうと・・・。

あと、鉱物関係の本やなにかをお願いしておいたら、今度お城の図書館に連れていってもらえるらしいので、それでいいかな？

これってもしかしてダイヤモンドとかも作りだせる・・・のかな？

うーん、成功したらすごく問題になりそう。

まあ、物作るの楽しいから宝石ばかりつくって楽しんで金持ち！はしないんだけどね。

そういえば、鏡がほしいなとおもって、銀とガラスを使ってつくったんだ。

うーん、さすが僕。かわいいね！鏡の中で可愛らしい幼女がニコッと微笑む。

上目遣いに見上げてみる。うん、はかいりよくはばつぐんだ！

思わず自分なのに、可愛いと抱きしめそうになってしまった。危険だ。

目標として、細々とした物を売って知名度をあげてお店？受注販売かな？

それでお金がある程度稼いだらリュカさんに剣か鎧をプレゼントしたいな。

騎士で迷宮が世界に存在して、魔物がいるってことはやっぱり戦闘するんだろっし………。

リュカさんには止められたけど、カーターさんにいつでも訓練に来いと言われたので

鈍らない程度には身体も動かしたい。うん、元の世界にも男の身体にも未練はありすぎるけど、っていうか中身は大絶賛男の幼女だけど

この世界は楽しいから、しばらくここで頑張っていこうと思う。

けど、帰れるのかな？いや、無理ってかいてたしなあ。寿命とかどうなるんだろう？

そもそも、男と結婚してセックスして子供……いやいや、いま背筋辺りに悪寒がゾゾゾっと走った。

ブンブンと首をふる、うわ、鳥肌までたってるよ……………。

考えないことにしようっと！

6話 初めての露店

「しっかし、意外な特技よねえ？」

真剣な目付きで、僕の造った指輪なんかをリュカさんが眺めている。

「剣も使えて、これだけの加工品を作れるなら冒険者にならなかったの？」

「命の危険が大きいですし・・・どっちかというと中距離や後方で指揮するほうが・・・あ、なんでもないです」

あいつが前線はいつも引き受けてくれていたしなあ・・・と考えてるとリュカさんがこちらを見ている。

しまった、指揮とか年齢的におかしいかな？

「ちょっとまって、ティアちゃん。もしかしてエルフの指揮官とかだったりのの？！」

ガシッと肩を捕まえられて、揺さぶられる。ちょっと、まつ、くるし
つつ

「えっ・・・あ、いえ・・・その・・・ないしですよ」

あははと苦笑すると、不意に手を離してもらえる。あぶない、つつ
こんで聞かれたらどうしようかとおもった。

「そっか、まあいいわ。人に聞かれない事ぐらいあるものよね」

「剣も使えて指揮経験者か・・・常識を知らなさ過ぎるところもあるけど・・・凄い人材じゃ？」

ぶつぶつと最後のほうは小声で何をいつているのか、よくわからなかったけれど納得はしてくれたっぽいかな？

ゲームの中で指揮を取ってましたとか説明できないもんね。

「あ、そうそう。これ商業ギルドのカードよ。身分証にもなるから、無くさないようにね？心臓の位置にカードを持っていけば出し入れできるわよ」

「ありがとうございます」

クレジットカードほどの銅色のカードを渡される。へえ、あ、名前とこの都市の名前がのってる。

商業ギルド所属かぁ・・・。商売たのしみだなあ、MMOとかでも生産と露店好きだったし・・・さっそくいくかな！！

「迷子にならないように、知らない人にはついて行っちゃだめだからね?!」

いやいや、リユカさん僕一応年上なんですけども・・・

「じゃ、私は仕事行ってくるからね？困ったことがあれば私の名前だすのよ？いいわね？」

ぐっとリユカさんの顔が近づいてくる、恥ずかしいってば！

「ふふふ、真っ赤になってティアちゃんはやっぱりかわいいわねえ。じゃ、行ってきます」

部屋をでていくリュカさんに小さく行つてらっしゃいというといわあいいわあと思えていた。大丈夫だろうかあのひと。

さて、露店へ出す商品の準備つと・・・上手く行けば店かどこかに商品を降せればいいんだけど

良心的な店なんてそうそう、見つからないだろうし。とりあえずはしばらく露店かな？

中央広場から東の大通りを進んだ場所にある露店街。大勢の人で賑わっている。うわあ、人ごみすごすぎて視界が・・・

たしか、この辺なら空いていればどこでもいいって事だったよね？

広場のようになっている隅のほうに、風呂敷代わりに商品を包んできた布を広げて商品を並べていく。

露店台もなにもないので地面に布をひいて商品を並べるだけだ。向こうの世界でも銀細工の指輪とかうつてる外人さんいたなあ。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・
お客さんこない。まあ隅っこのほうだから、しょうがないんだよねえ。さつきからチラチラと視線だけは感じるんだけど。

「お嬢さん、ちょっと見せてもらってもいいかな？」

「あ、はい。どうぞー？」

高そうな服に身を包んだ老紳士・・・って、こんなところに貴族かな？普通下賤な者と一緒になどーってイメージしかないので、すごく驚いた。

「おや？私のような者が珍しいかね？」

見上げている視線に気づいた老紳士にそう言われる。

「あ、ご、ごめんなさい・・・貴族の方ですよ？どうしてもイメージが、市井の者の作ったものなぞーって感じで・・・」

えへへと可愛らしく笑ってみせる。

「はっはっは、正直なお嬢さんだ。そんな絵本の中のような貴族などこの帝国におりはせんよ？皇帝陛下がお許しになられはせんからな」

老紳士が笑顔で笑って教えてくれる。うん、我ながらこの笑顔のこっちはばつぐんだ！

「それでは、この指輪をもらおうかな？良いデザインだ」

「はい、ありがとうございます。えーっと銀貨6枚です」

銀貨2枚を使って加工した物だから、これぐらいでいいかな？？

「ふむ……、これで銀貨6枚とは……………」

驚いたような表情でこちらを見つめられる、や、恥ずかしいのである
んま見つめないでください。

「…………お嬢ちゃん、これを作ったのはお嬢ちゃんだね？」

「ふえ？え？そうですけど……？」

普通露店ってそういうものじゃないのか？なんだろう？商品は褒め
られたからまずいことはないよな？

「ふむ、値段を言ったときの様子からそうであるとは思ったが・
・・製作者は別にいると言うほうがよいぞ？色々と危険なこともある
でな？」

そうか、なるほど。子供が作った商品なら買い叩いて転売もできる。
そして極論すれば僕を攫って商品を作らせればばる儲けできる。

子供の外見をしているから、純粹に心配してくれているのだろう。
良い人のようだ。

「…………わかりました、ありがとうございます」

にっこりと笑って返事をする。

「……今の言葉だけでわかるか、なるほど、お嬢ちゃん名前を聞いてもよいかな？」

「はい、ティアといいます。」

「そうか、では失礼するよ。良い買い物をした」

そう言って優雅に礼をすると老紳士は雑踏にきえていった。うーん、そうかそこまで考えてなかったなあ。

先ほどの老紳士がきっかけになって注目されたのか、商品を見に来るお客さんが増えて持ってきた商品が先ほどまでの客入りが嘘のようにほとんど売れていった。

うーん、ちょっとぐらい買い食いできるかな？これで材料買えばもっと色々つくれるよね……。うーん、なにをつくろうかな？

「おい！お前！！」

「あ、はい？なんででしょう？」

見ると目の前に子供が立っていた。金髪でソコソコ整った身なりをしているようだ。

「これ、お前が作ったのか!？」

怒っているのだろうか?そもそも、礼儀を知らない子供だなあ・・・

・

「そうだけど?」

「そ・・・そうか・・・」

どうしたのだろうか?一気に大人しくなつて、心なしか顔が赤いよ
うな??

「なんでそんな値段で売っているんだ?」

「え?・・・高すぎたかな???」

商品の出来に比べて高すぎることを怒っているのだろうか?

「ちがう!逆だ!」

「へ?逆・・・いや?・・・逆って?」

安すぎる!と目の前の子供に怒られた。けど相場なんてわかんない
んだよね。

「って言われても相場なんてよくわからないし・・・」

「ちよつとこい!」

腕を掴まれる、簡単に振りほどいて組み伏せるぐらいはできるけど・

・うーん、悪い子じゃなさそうな気がするし。

あとあの、強引に引きずっていこうとする少年を説得して、とりあえず荷物をまとめさせてもらった。

どこいくの？と聞いても答えてもらえずに、ズンズンと進む少年。

そして中央広場に近い「ファーマリア雑貨店」と書かれた立派な石造りの店に連れてこられた。なにがなんなんだ？

訳の分からないうちに、応接室と書かれたところに通されて、座らされている。うん、紅茶がおいしいナー。

（だから、あいつの細工の腕はすごいんだよ！それを相場がわからずに売ってたんだ！！）

（しかしな、確認もしないで無理やりつれてきたのだろう？）

（危ない目にあつたら、どうするんだよ！それにきちんと相場で売ればちゃんと儲けもでるし、うちにだって損にはならないし！）

（あらあら、貴方。とりあえずその子としゃべってみたらどうかしら？この子の初恋よ？）

なんか、扉の向こうから話し声が聞こえてくるんだけど・・・相場とか安いとか、実は品質がよくて安く売りすぎて他の店が商売

にならなくなる！

って感じで傷めつけられるんだろうか？に、逃げたほうがいいかな・
・・・・・・？

「お待たせしました。この店の主人のファールと申します、こちら
は家内のリアです。そして息子のアーランです。」

おおう、遅かった。親子3人揃って目の前でお辞儀されてしまう。

「あ、ティアです。よろしくお願いします」

ちょこんとお辞儀をかえす。

「まあまあ、可愛らしい子ねえ・・・・・・」

「ごほんっつ、息子に聞いたのだが、商品を1つ見せてもらえない
かな？」

どうぞつとポケットの中から指輪を2、3こファールさんに渡す。
奥さんと旦那さんが指輪を見つめ、ひっくり返し鑑定されてるのか
な？

下手じゃないだろうか？・・・・ん？？ふつと気づくとアーラン
君がこつちを見つめている。目が会つと真つ赤になって横を向かれ
てしまった。

なんなんだ？嫌われるような事をした覚えはないはずんだけど。

「ふむ、確かに良い出来だ。細工も細かく丁寧だ。ちなみにこれで

幾らになるんだい？」

「銀貨6枚で売ってますけど・・・？」

ビシッと空気が固まった気がする、え？なに？なんかおかしい？僕
おかしいの？！

「まあまあ、安いわねえこれなら金貨3枚は取れるわよお？」

は？金貨3枚？いやいや、元は銀貨2枚・・・

ポカーンとしてしまう。そこまでのものなの？！

「うむ、そうだな。それぐらいにはなる・・・露店というのも色々
と危険があるものだ。よければうちの店に卸してくれないだろうか
？」

・・・じつとファールさんの顔を見つめる。人はよさ
そうだが、目が合う。少し照れてるのかな？

「貴方！？」

ゾワッとするような殺気！？奥さんが低い声でファールさんと呼
ぶ。

「あ、いや、すまん。そんなじゃないんだ・・・、で、どうだろ
うか？手数料は一割、代わりに君の正体などは買い手には伝えない
し、

必要なら素材も私がある程度なら揃えることができる。それでもギ
ルドには顔がきくからね」

うーん、悪い人ではなさそうだ。一割というのも良心的。嘘をいつてる感じもしないかな？

「うーん、いいですよ？」

「そうか、やはりだめか・・・って、良いのかね?!」

そう言ってるんだけど、再度うなづく。

「そうかそうか、いや、断られるかとおもってときどきしたよ。他には何か作れるかね？」

「うーん、武器でも防具でも何でも作れますけど、ただ、あまり武器や防具は作ると面倒になりますので・・・作る気はないです」

「あらあら、多彩な才能ねえ・・・すごいわねえ」

「ふむ、ではティアさんが作りたい物を作り、私が店でそれを売る。手数料などは先程のとおり。そして正体は隠す。客からの要望はどつするかね？」

上機嫌でまとめにかかるファースンさん。

「装飾品などはオーダーメイドの相場と頻度はおまかせします。武器や防具は全部断ってください。作りたい時だけつくってもらってきます」

「わかった。一応商業カードだけ見せてもらえるかね？」

はいつと手渡す。

「ふむ・・・ハーフエルフなのは、良いとして・・・13・・・13でコレほどの物を作れるとは・・・」

「あ・・・いえ、その・・・それ手違いで27なんですけど・・・」

・・・沈黙が痛い。

奥さん、ティーカップ落とすほどショックなのかよ。

それから条件をまとめた契約書を交わし、2、3日に一度は納品にくるという約束をした。

タングステンやら合金をつくるためにいくつかの鉱物を頼み、他にも素材を頼んでみたら、二週間かからずに用意してもらえらしい。すごいな。

「おい、ちゃんと顔見せに来いよ!？」

「うん?大丈夫だよ、ありがと」

「べ、別にお前が心配じゃなくて、ちゃんと商品もってこいって事

だからな!？」

・ 真っ赤になって店に戻って行くアーラン君。 なんというツンデレ・

27でも関係ないからなっって言われたときは驚いたが、少年よ、その初恋は実らないんだ。 中身は男なんだぜ？

それにしても商売始めた瞬間に卸先の商店が見つかるとか、運がよすぎる気がするけど、いいのか？これ??

出来過ぎてるような気がする。

6話 初めての露店（後書き）

幸運の効果はすごいんです。
運の良さって最強ですよ、ね、ある意味！

7話 図書館とロリコン紳士（前書き）

しばらくはほのぼのした話になる・・・のかな？
冒険や戦闘はもう少しあとになります！

7話 図書館とロリコン紳士

どうも、こんにちわ僕です！

ありふれた日常ってというのは幸せな事なのですよ？

適当に装飾品を作って、納品する。お金がもらえてその日を平和に暮らせる。幸せなことです。

向こうの世界に戻れても、冴えない男と、絶世の美少女。うん、男とキャツキャウフフしなきゃならないっていうのをのぞけば

こつちの世界のほうがいいです、だって加工魔法でお金は稼げる。

冒険に行かないのかって？なにいつてるんですか？！命がけですよ？！死んだらどうするんですか、それに怪我したら痛いし。

さっきも言いました、ありふれた日常は幸せな事です。

ちなみに、あれから結構有名になりました。

店にはアティという単純すぎる偽名で商品をだしている。銘もきちんと商品に刻んでいるよ？そっちはティアーズって付けてるけど。

この世界では涙という意味では通じずにアティの本名はティアーズなのか、細工士名としてつけたのかと色々言われている。

オーダーメイドはもちろん、滅多に受けない。ファールルの意向だ。うければきりが無いほどの人気・・・らしい。

それに滅多に受けないことでプレミアがついて希少価値がぐと言われた、その辺この世界でも一緒なのか。

ちなみに、ナイフを2本と小手だけ作っておいたところ、帝国騎士団の隊長さんが問い合わせにきたと言っていた。

私が気が向いた時だけで絶対に注文は受けないと言っていたので、きっぱりと断ってくれたらしい。

そういえば、ファースリア雑貨店だけど、結構有名なお店だったみたいで、リュカさんにすごく驚かれた。

うーん、なんだろう、ほんとに上手く行き過ぎている気がする。

そのうち、何か起きそうでこわいなあ・・・あはは、気のせいだね。

「というわけで今日も図書館ですっ」

可愛らしくひとりごとをつぶやいてみる、いや、そこ、やめて冷めた目でみないで！一応外見は美少女だから。

ーちなみに、本棚の影でこれを聞いて、悶えている司書が数人居た。

こここのところ日課になった図書館、常識や世界の事がさっぱりなの

で、図書館にかよって本を読みあさっているのだ。

ちなみに、高いところの本を取るときは必ずと言っていいほど、若い司書さん（エミリオっていうらしい）が駆けつけてきてはしご台を押さえてくれる。

取ってくればいいのには思うのだが、男なんだろう、うん・・・
・すっごい下から本を取る間視線を感じる。お尻とか太腿に・・・
・。

それ以外は、優しくて本と一緒に探してくれたり、わかりやすい本を教えてくれるからいいんだけど・・・鳥肌たつよ？ほんとに。

「いらつしゃい、今日も読書ですか？？」

爽やかな笑顔で声をかけてくるこの、金髪のお兄ちゃんがエミリオ。きつと変態紳士だともう。幼女をはしご台にのせて

下から絶対領域を視姦してるんだからね・・・ダメされないよ！？

ぺこつと小さくお辞儀を返して、本に視線を戻す。タイトルは「ギルドシステムと各ギルドの役目」

横に積んである本は「冒険者ギルド」「冒険の心得」「魔法入門書」「初心者向けのエンチャント講座」

「勉強熱心ですね、魔法を覚えたいのですか？？」

横の本のタイトルをみたのだろう、エミリオが聞いてくる。

「うーん、使えればいいんだけど、あんまり適性がないかも?」

入門書を読んで何度か試したのだが、最近ようやくマッチ程度の火が出せるようになったぐらいなのだ。

「よろしければ、私が教えましょうか?」

「え??? エミリオさんって魔法使えるの???」

照れたように頭をかくエミリオ、うーんイケメン爆発すればいいのに……。

「ええ、これでも魔術学院に在籍していますよ、卒業後は帝国の魔術機関にはいることになっています」

はい? それってあれでしょ? 俗にいうエリートっていうんじゃない? ?

「そんな顔しないでくださいよ、ほんとですよ?」

にこつと微笑むエミリオ、うん、だからイケメン爆発しろっておもう。中身男の俺がみても男前だなあと思うし。

「うーん、けど勝手にするとリュカさんに怒られるし、リュカさんに許可とってからかなあ?」

騎士団の練習にも参加したいんだよねえ……とつぶやく

「リュカってリュシカ隊長ですか?!」

驚いたような声をあげるエミリオに周りの視線が集まる、ごめんな

さいと周りに2人して謝る。

「そうだよ？私の保護者なんだ、許可貰えたらお願いするね？」

にこつと微笑みながら見上げる、僕の必殺技の1つである。男女問わずに破壊力は抜群だ！

「はい、楽しみにしていますね」

にこつとイケメンスマイルでカウンターされる、むむ？こやつできる？！

「あ、ガンドルさんだ、こんにちわー」

髭を生やしたマッチョな赤髪のおっちゃん、魔術師らしい……よ？どうみても戦士なのに（笑

初めて会ったときにそういたら、笑いながら頭を撫でくれた。うーん、おやじさんって感じがする。

ちなみに、会うたびにローブから飴やクッキーをだして渡してくれる、餌付けされているよ僕！

「勉強熱心だな？エミリオは手ははやいからな、気を付けろよ？」

そついつと頭を撫でながら、飴玉を3つ渡してくれる。うーん、子供じゃないんだけど、まあいいかな。

「ちよつつ、ガンドルさん！？いくら僕でもティアちゃんには手を出しませんよ！？」

・・・ティアちゃんには？他にはだすのか??？

じとーっとした目でエミリオを見つめる、乾いた笑いをしながら許可もらえるといいねと残して逃げていった。

「じゃ、ガンドルさん、きょうはちょっと寄り道するのでボクもいきますね」

飴ありがとっつと笑顔で見上げてからお辞儀する。

ファールさんに頼んでおいた鉱石が今日届くらしいのだ！

8話　ぐぐれるんです。

実感がわかないけど、僕は結構な額のお金を持っているらしい？

リュカさんには商売しているのがばれていた。なぜか？って保護者なので、僕の商業用のギルドカードの残高がわかるらしい

このカード身分証やキャッシュカード代わりにもなるみたいで、便利。無くしても本人以外には使用できないらしい。

なので、隣の倉庫替わりの部屋じゃせまいし、色々と不便なので、アトリエを借りました！

ファールさんがよさそうな物件を見つけて借りてくれた。素材用の倉庫もあるし、道具も一式揃ってる。

ベッドやら家具もあるんし、この稼ぎで一人暮らしとかもできるんだけど・・・ね？ほらそこは・・・うん。

僕だって男だから美人のおねーさんと一緒に住んでいられるのは、嬉しいし・・・そのなんていうのか、1人は寂しい物だよ？

お互いが家にいて、一緒に暮らす、しゃべり相手がいて。一緒に寝て・・・あ、いや、や、やましいことは考えてないよ？！

リュカさんの胸やわらかいとか・・・いい匂いだとか！いや、うん、今は外見は幼女だし、大丈夫だ、問題ない（キリッ

防犯用なんか以前オーダーメイドを受けたエルフの魔術師さんが

結界やら色々貼ったりしてくれたらしい。

そして、素材倉庫には鉾石の山……もう知らない人がみたら、ただの石が転がってるだけだけど……。

そしてお知らせがあります!!!

なんと、某有名検索サイトが使えるのです! え? 頭大丈夫かって? 失礼な!!!!

ステータス画面をいじっていたら、某有名検索サイトのコマンドがあった? ので使ってみたらアクセスできました。

何を言いたいのか、言ってるのか、僕自身もわからないけど、脳内でぐぐるんです。

すごく変な気分ですけども……書き込みとかメールとかはできない、ほんとに検索して調べるだけ。

図書館で本を読みながらステータス眺めてて偶然気づいたんだけど、これって凄いことだよ!?

素材や合金、作り方が大まかにならわかるし、海外サイトを調べれば詳しいことも乗ってる。まあ企業秘密とかはわからないけど。

素材の元がわかれば加工魔法で作れるからね、その場で小躍りしちゃうぐらい嬉しかった。

ーちなみに、数人がやっぱり本棚の影から見守っており、記録水晶もつてくりゃよかったと血の涙を流していたとかいなかったとか。

超硬合金に耐熱合金、ステンレスなんかも作ってみた、インゴットに加工しただけでまだ製品にはしていない。

ガラスセラミックなんかも作れたので、セラミックナイフとかも制作できるかな？

ミスリルとかがある以上価値はどうなんだろう？とは思っただけど、安価で作れるからかなりの価値になりそうだし……。

あと、必要なのは武器の所持許可と魔法練習、騎士団への練習の免許をリュカさんにもらうぐらいかなあ？

「リュカさん、あのね？」

「どしたのティアちゃん？改まってさ？」

「魔法を教えてくれるって人がいるので練習したいんだ、あと、騎士団の練習に参加したい」

食事をする手をとめて、じつところをみてるリュカさん。うーん、慣れない、見つめられると照れてしまう。

「うーん、ほんとそんなことさせたいくないんだけど……ダメっていつでもティアちゃんやりそうだし……」

あははと苦笑するしかない、実際素振りや走りこみはしているのはリュカさんは言わないけどばれているはずだ。

ーティアが早朝にランニングをするようになって、巡回の兵士とマラソンをするお父さんや、お兄さんが増えました。

ー「いやねえ、だって娘なんて近寄ってもくれないのに、笑顔でおはようございますって言うてくれるんだよ!？」と力説する匿名の36歳2児のパパ

「あはは・・・ごめんなさい」

「騎士団のほうは・・・できれば私の隊のほうにって言いたいけど、ティアちゃんがでたいのってアイツ（カーター）のほうよね？」

「うん、リュカさんのほうにも顔はだしに行くよ？」

見上げてにこつと微笑む、リュカさんは罰がわるそうに視線をそらし

「私のほうがおまけ的なのはまあ、我慢するけど・・・魔法つて誰に？」

「んつと、エミリオさんっていう図書館で司書してるおにーさん。」

そっとうと露骨に顔を顰めるリュカさん、うん？なんだろう??? ちょっとロリコン紳士っぽいけど、普通の好青年だとおもうんだけど。

「あの鉄仮面のエミリオ?????」

へ????思わず聞き返してしまった、鉄仮面??あんなに表情があつてニコニコしてるのに??

「知らないの?子爵だけど爵位継承権を持っていて、あの容姿。しかも将来有望っていうことでかなりモデルのよ?」

「へー、そうなんだ」

イケメン爆発すればいいのに

「けど、まともに相手すらしない。美女に張り付かれても顔色1つ変えない。ついたあだ名が鉄仮面よ?男色じゃないのかって言われてるほどよ?」

あー・・・なるほど、ちっちゃい子にしか興味はないんですね、わかります。は、犯罪だー!?!え?あれ?けど僕だと犯罪にならない?!

なん・・・だと・・・身の危険か?!危険なのか?!(おろおろ

「だから、大丈夫ね。私のほうから魔術ギルドか学院の練習場の使用申請はしておいてあげるから」

「あ・・・あの・・・りゅ、リュカさん・・・エミリオさん、すごく笑顔で、優しいですけど・・・(その身の危険を感じます)」

「ぷつ、あははは。ティアちゃん、そんなわけないじゃない。あのエミリオよ?夜会で何度かみたこともあるから間違いないわよ」

ど、どうでしょうか?死亡フラグという感じがすごくします。い

え、そうです、見た目は少女なのです。

だから手をだしてくることもないですし、世間体もあるので大丈夫です。きっとそうです！

「ところでティアちゃん、そのリボンは？」

「そのエミリオさんに貰ったんですよ？」

カチャンつとリュカさんがスプーンを落とす、いや、なに？ねえ？
そこまでシヨックな事なんですか？！

「・・・・・・・・リボンは誰に？」

「だからエミリオさんです」

何事も無かったようにスプーンを拾って、流しにもっていき、代わりのスプーンをとってきて座るリュカさん。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ありえないわ」

小さく首を振って否定される、いや鉄仮面のほうがありえないんですけど・・・・・・・・。

「まあ、さすがに大丈夫よ？変なことはされないとおもうしね？」

いや、されたら終わります。中身男なんですよ？！もちろん彼女なんていませんよ？初めてのキスや体験が男なんてイヤですよ！！

「あははは、怯えるティアちゃんもかわいいなあ。ほんつと27つ

て言われても信じられないわね」

撫で撫でと頭を撫でられる、顔を赤くしてむくれたように見上げてしまう

「それよそれ、たまにすごく大人びてドキッとするけど、基本子供にしか見えないもの……」

くすくすとリユカさんに笑われる。なにはともあれ、お許しはもらえたのだ。よしとしよう。

「そつえば、ティアちゃん??小手とナイフって作れたりする?」

思わず聞かれた単語にドキッとしてしまう、そうだった。作って売れて、帝国の隊長さんが問い合わせにいったファールさんの言葉を思い出す。

「いえ、いいわ、顔みればわかった。ストラウフ大隊長がすごく気に入ったみたいだね?使い慣れた小手を放り出して、新しい小手をはめてエンチャントをわざわざ直したのよ」

ストラウフさんというのは知らないが、その人が新しい小手に変えたというのが、尋常じゃないということは何なくわかる。

「それで、無茶なんて言わないあの大隊長が、装備を新調したいとまで言い出したからね……近頃迷宮や魔物も活発になって物騒だからかな?」

どうやら、試しに作ったあの小手が大騒動の原因になってる??

「えっと・・・まずかった???」

「そうね、大隊長の以前の小手はドワーフの名工の手によるものよ?」

ドワーフ、例にもれずこの世界でも金属加工や鍛冶に凄まじい才能を発揮する、その名工の作品より良いと言われたのだ。

作った者としてはすごく嬉しい、試しに作ったとはいえ、3日もかけて念入りに使いやすさや強度、剣を振るためだけでなく、格闘もできるようにと工夫を重ねたものだし。

「えーっと・・・じゃあ、もしかして?」

「ええ、帝国の上層部もその名工の情報をつという話になってファーリア雑貨店に問い合わせたわよ?けれど、店主がかたくなに、依頼主よりの要望で明かせないと。取引停止されたら、他の国へ行ったらどうしてくれるのだ?といったそうよ?」

そうか、よかった。ファールさんはやっぱり良い人だったのか。

「だから、あんまり派手な事しちゃだめよ??」

もう手遅れな気がします・・・・・・ちなみに、この間見せてもらったリユカさんに鎧をプレゼントしようと思って制作してたりする・・・あはは、やばいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2431ba/>

黒の指揮官

2012年1月13日17時38分発行